

## 英語の中間構文を支える句構造

— 認 知 構 造 の 形 式 化 へ の S O O T h 2 の 寄 与 —

田 原 薫

### 0. はじめに——「認識文法」の必要性

ここ数年、ラネカー(Ronald W. Langacker)の流れを汲む認知文法、或いは認知意味論が隆盛を迎えている。大修館書店の月刊『言語』1998年11月号では、「[入門] 認知言語学—研究プログラムへの招待」という特集が組まれていて、その中で、辻 幸夫は「認知言語学の見取り図」という表題の講座で《認知言語学から見た関連諸分野と認知言語学との関係》と題する図を提示しているが、その図によれば、生成文法が、概念意味論および関連性理論とともに、認知言語学とはまったく共通の(関心と)研究領域をもたない、離れた位置に置かれている。この扱いははたして妥当であろうか、という疑問が生じる。

たしかに、「生成文法」を、現下におけるチョムスキー流の変形生成文法に限定して見た場合、片や統語論(統語法)の自律性を基本テーゼとするチョムスキー派の主張と、片や「形式と意味のペア作り」'form-meaning pairing'を標榜するわりには、その「形式」の捉え方が幼稚でさっぱり深化していかず、従って意味論だけで独立王国を作ろうとする傾向が見られるラネカー流の「認知文法」【それは未だ文法ではない、意味論にすぎないのだが】とを比較すれば、共通部分がないのは当然であろう。

辻 の図によれば、認知言語学の内訳として認知文法・認知意味論・メンタルスペース理論・音韻・形態論・その他諸研究が挙げられているが、「認知文法」と「認知意味論」が別の項目として挙げられているのは、恐らく、自著で自説を'cognitive grammar' と名づけているラネカーの主張を、他の、たとえばレイコフの主張などと区別して指したものと思われる。しかし実際は、認知メカと統語法とを関連させて論じた、真に「認知文法」の名に値するものは、まだどの学者からも提出されていないのが現状である。

私は、現下における「認知文法」「認知意味論」に一応の存在意義を認めはするものの、それらは言語の全体像の究明には不十分であり、それらの主張だけが度を超して重視されると、かえって言語のバランスの取れた研究を阻害する恐れがあると思う。その最大の理由は、それらの理論が、認知なり思考なりの通達(communication)を度外視しているからである。たとえばラネカーの思い描く認知者・話者は、独りで認知対象たる外界と対峙しており、独りで作文するだけで、その認知結果を他人に伝えることに関心がない。

ラネカーの認知文法のテーゼである《文法形式は意味（認知プロセス）を具現化する》という主張は、初めに認知プロセスありき、ということだから、解釈意味論の立場に立つ生成文法と真向から対立するが、もし《文法形式は意味（認知プロセス）のみを具現化する》というふうに行き過ぎて理解されるならば、私はそれに異議を唱えざるを得ない。たとえば日本語のように、SOVの語順がその言語の特質として、いわば理不尽に決まっているような体系内では、たとえ、これこれの認知プロセスを表現するのにSVOの語順が望ましいのだが、と思うケースがあっても、そんな語順の文を（独白なら別だが）聞き手に向かって発することはできない。何とかしてその言語の統語法のレパートリーに納めて発話しないと、通達が果たせないのである。つまり、統語形式にしても、語彙形式【たとえば名詞の文法性(gender)が意味とは独立に決まっているなど】にしても、言語は合理性を超えた理不尽な面をもっているものであり、従って作文過程の出力である文は、通達効率に制約された、その理不尽な側面をも具現化(instantiate)しているのである。

以上のように考えると、文法形式は話者の経験した認知プロセスを決してストレートに具現化するものではなく、それをどう情報化して聞き手に流すか、ということを配慮に入れて組織化された【普遍性もあるが】個別言語特有の手段体系なのである。チョムスキーもラネカーも無視していることであるが、言語は単に表出ではなく、《聞き手によって聞き取られ・解釈される、すなわちそれ自身を経由して間接的・二次体験的な認知プロセスを聞き手の心の中に起こさせる営み》である。その間接的・二次体験的な認知プロセスは、聞き手の認知プロセスの記憶との照合・同定を通じて進行するから、これを「認識プロセス」 'recognitive process' と呼ぶことができよう。

結局、ラネカー流の認知文法 'cognitive grammar' では不十分なのであり、必要なのは、通達を考慮に入れた、認識プロセスの体系たる「認識文法」 'recognitive grammar' であろう。そしてそこでは当然、統語法もその中に統合されている筈である。

## 1. 文法は「認識的意味誘導過程の具現化」——たとえば主語

何かの発話と通達をする場合、もちろん話者の側の認知構造が先行しなければならないが、それは各個別言語特有の統語法と掛け合わされることによってしか、聞き手に流れて聞き手の心中に認識プロセスを起動・進展させることができない。そしてその統語法なるものは、チョムスキーの意味で自律的とは言えないが、決してラネカーの意味で合理性の所産でもなく、個々の話者が抵抗できない不条理・理不尽な側面をもっている。それゆえ、黄金の中庸(golden mean)というべき言語学者の態度は、自律的な統語論から意味が派生するとか、自律的な認知意味論から統語法が派生するとか、一方的に宣言・主張することではなく、対等な両者の相互作用と相関関係を虚心坦懐に研究することであろう。

以上のことを踏まえて、たとえば「主語」という概念【それは中間構文を考察する際にも重要だから】は「認識文法」ではどう捉えられるか、考えてみるが、まずその前にチョ

ムスキー流生成文法とラネカー流認知文法ではどう捉えられているかを概観しておきたい。生成文法では、主語とは屈折要素句 (IP) 或いは主格照合子句 (Agr<sub>S</sub>P) を完結させる指定辞 (SPEC<sub>I</sub>/SPEC<sub>Agr<sub>S</sub></sub>) であり、単なる X<sub>bar</sub> 図式の一要素であり、意味論とはまったく関係をもたない。一方、認知文法では、人間の認知メカには 'primary prominent figure' である 'trajector' というものがあって、その 'trajector' に対応する描写対象 (profile) をもつ名詞句が主語である、という。どうもこの発言は 'subject' と 'trajector' とを往復する循環論にすぎないようである。少なくともこんな定義は英語学内部でしか問題にならず、たとえば「村落が雪で埋まった」という意味のロシア語文(1)では、主語があるのかどうか、あるとすれば何が主語なのか、は必ずしも定かでない。

(1) Derevnju zaneslo snegom.

村を(女性) 吹き埋めた(主格) 雪で(主格)

上の例文では、主語にふさわしい主格はどこにも現れないし、非人称の中性単数の動詞は「雪」とも「村」とも性が一致していない。そもそもこの文は能動態でも受動態でもないし、「村」と「雪」のどちらが 'trajector' にあたるのかもわからないから、認知文法では分析が難しい。勿論、生成文法にとっても難物であることは言うまでもない。

さて、「認識文法」での主語の捉え方であるが、これは「情報分割」という概念と密接に結びついたものである。ラネカーが Langacker(1995)において使った例文 = 'That Don will leave is likely.' における [that Don will leave] は生成文法で言えば補文化子句 (complementizer phrase, CP) であり、その中の clause [Don will leave] が屈折要素句 (IP または Agr<sub>S</sub>P) であるが、実は、前者は後者の上に単純に complementizer たる that が付け加わったもの・従って情報的により豊かになったもの、とは言えないのである。というのは、補文化子が掛かることによって失われるもの・語用論的通達力といったものがあるからである。

たとえば、that がある場合とない場合とで、対応する日本語の違いをみてみよう。

(2) That Don will leave ... 「ドンが去る(だろう)ことは…」

(3) Don will leave. 「ドンは去るだろう。」

(2) と (3) とでは「ドン」のトピック性 (topicality) が違っている。勿論、(3) で Don にストレスを置けば、そこが Rhema の解釈を受け、「余人でなくドンが去るだろう」「去るのはドンだろう」という解釈を誘導することはできるが、要するに主語 Don とそれに対応する述部 will leave との間に、情報が流れていく(新旧の)勾配あるいは段差のようなものが存在し得るし、通常存在する。しかし(2)では主語と述部との間の情報の勾配あるいは段差が、少なくとも積極的には感じられない。つまり、補文化子 that が掛かることによって、勾配や段差が消されるか、少なくとも緩和されるのである。主語的性格すなわち主語性というものを、1 か 0 かのデジタル的なものと考えず、程度の強弱を以て分布する連続体と考えると、(2) よりも (3) の Don の方が主語性が高いと言える。

## 2. 情報分割を支える人間の実存的性（さが）

情報分割というのは、聞き手、或いは聞き手の情報処理を支援する話し手にとって、被叙述項と叙述部との間の、新／旧情報としての勾配または段差の存在を明瞭にするために取られる手段のことを言うのであるが、話し言葉の場合はストレスやイントネーションがその役に立つ。しかし、話し言葉と書き言葉を通じて使われる手段は、広義の「主語」にあたる被叙述項とそれに対応する叙述部とを、何らかの手段で適当に離間させておくことである【適当に、というのが微妙で、離れすぎてもだめであるが】。このことは必ずしも時間的な隣接（継起）関係を避けるということの意味しない。むしろ、広義の「主語」を最高位の指定辞（SPEC<sub>Pd</sub>）に置き、従って対応する述部をその残部（Pd'）とする句構造で、そのペアの上にそれらを共通に統御する何の成分も掛からない場合、つまり指定辞（SPEC<sub>Pd</sub>）と残部（Pd'）とを結束させる要素がなく、それらが最外部に露出して並置されている場合は、すでにそれらは適当に離間している（例の一つ）と言ってよい。こう見なす点は生成文法の見解と違っている。生成文法では、上に何が掛かろうと掛かるまいとIPはIPであるし、VPはVP、述語句（PdP）は述語句（PdP）であり、括弧式型で書けば常に [<sub>PdP</sub> SPEC<sub>Pd</sub> Pd' ] のように書かれる。しかし認識文法では、最高位の句の標識はむしろ省いて [SPEC<sub>Pd</sub> Pd' ] と書いたほうがよい。PdPという範疇資格は、上に何かの掛かって【X [<sub>PdP</sub> SPEC<sub>Pd</sub> Pd' ] で】初めて意義を生じる、と考えるからである。つまり「…句」「…phrase」とは内部の情報勾配または段差が緩和されたsyntagmaだから、上に結束要素が掛かるまでは、単にSPEC<sub>Pd</sub>が「主語」、Pd' が「述部」なのである。

もし話し手が「主語」のみを聞き手に流し、その直後に「述部」が後続しなければ、聞き手は、「主語」がどうなのか、どうなったか、などと興味・関心をもち、話し手が何かの続報でその興味・関心を満たしてくれることを期待する。それがいわば人間の実存在的な性（さが）であろう。情報勾配または段差というのは、その性（さが）の具現であるが、聞き手側のそんな性（さが）を利用して、話し手は聞き手の心中に興味の中心 'the communicational trajector' というべきものを作らせ、二次的な認識プロセスを起動させ、リードしているのである。とすると、ラネカー派の「描写対象としての事態の解釈において中心的な地位を与えられる要素 'the trajector' が主語になる」というテーゼは不適切で、むしろ《描写対象としての事態の解釈の伝達において中心的な地位を与えられる要素 'the communicational trajector' が主語になる》という方が適切であろう。

このように主語が話し手の事態解釈そのものの内部だけで決まらず、話し手の伝達計画にそって二次的に作られるもの、ということになれば、事態解釈の情報内部にないものは主語になれないから、結局、情報内部の何かの抜擢されて、聞き手の興味を繋ぎ止める成分すなわち主語の地位に就任するわけである。そこで、認知文法家のあれほど嫌いな、そして生成文法家のあれほど好きな、句構造や移動変形といった道具立ても、通達に必要な情報の編集手段として必要になってくるのである。

### 3. 認知意味論と和合する句構造はあるか

表題のような大上段に振りかぶった問いかけをする前に、そもそも句構造という思想は必要なのか、ということが問題となろう。言語学者の中には、チョムスキー的な統語観に反発するあまり、句構造にアレルギーをもち、なるべく句構造に頼らない理論こそ良い理論だ、という態度で論説をなす人もいるが、どうも「羹（あつもの）に懲りて膾（なます）を吹く」嫌いなしとしない。格の現象も一致の現象もない中国語もそうだが、格の現象と一致の現象が微弱な英語という言語を分析する場合も、階層的な句構造（と語順）以外には文法機能を信号する装置が概ねないのであるから、格や一致や、自由度の大きい語順のような装置をもつロシア語やチェコ語と違って、階層的な句構造の果たす役割が大きく、従って句構造を論じざるを得ないのである。分析対象たる言語を離れて句構造の、従って句構造文法の絶対的価値を論じてみても意味がない。

しかし、句構造文法といっても、能動性の低い目的語（候補）から順に節文構築現場に導入し、能動性の高い主語（候補）をより遅く導入するチョムスキー流の「VP内主語仮説」または「vP内主語仮説」が種々の欠陥をもつことは、いくつかの拙論で述べたとおりである。従ってここで検討に値するのは田原流のSOOTh2である。SOOTh2の節文構築図式を、従来と変えて、左から右へ構築するように書いてみよう。

図1

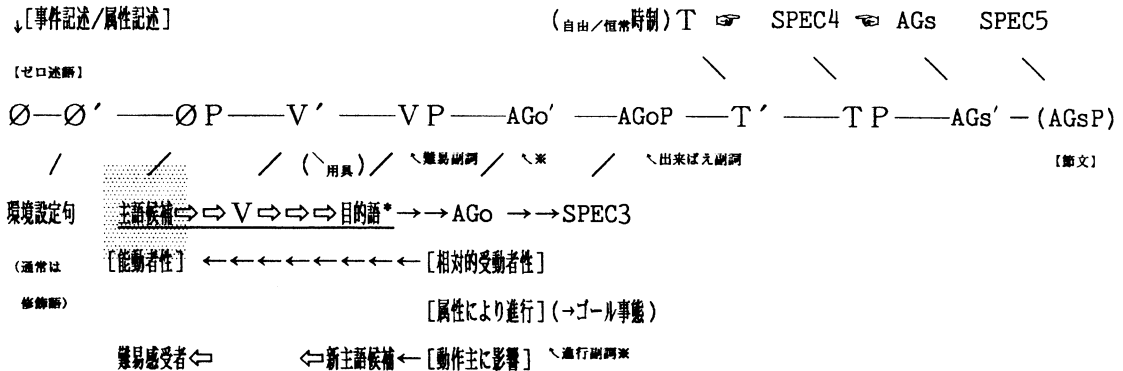


図1では、本稿の眼目である中間構文も収容できるように、複雑な部分（最下部2行）も書き込んであるが、それは後ほど詳しく解説するとして、当面は [能動者性] ← [相対的受動者性] の行より上部を見ていただく。

まず最初に現れるゼロ述語Øは、何かについて叙述するぞ、という心構えのシンボルであるが、事件を記述するか／或る物の属性を記述するか、という素性をまず選択しなければ叙述行為は始まらない。それが選択され、今の場合は仮に[事件記述]という素性がØに乗り込んだとする。ØPの指定辞として主語候補が入るが、その大役割はまだ未定である。しかし、次の段階でVPに掛かる資格述語AGo(以前AGRoと書かれていたもの)が素性[相対的受動者性]を取れば、その影響がフィードバックされて、主語候補は[能動者性]という素性を帯びる。勿論、

V P の指定辞たる目的語\*は直上位の述語AGo に引率されている【引率・配率という用語の意味は、たとえば田原(1998a)を参照】から、AGo のもつ[相対的受動性]という素性は目的語\*にも浸透する。以上のように、能動者と確認された主語と、受動者と確認された目的語\*とをもつ基本的な句構造から、最も無標的には能動構文が派生する。すなわち主語はまずT P の指定辞たるSPEC4 に昇進するが、そこでT の配率と AGs【以前にAGRsと書かれていた形容詞的要素で、主語にふさわしい資格をチェックする。】の引率を受けたSPEC4 は、主格の格選択を受け、さらに一致制御のためにSPEC5 の地位に昇進する。

ところで、図1の最高節点は「(AGsP)」と標示されているが、括弧で括られているのは、先ほど述べたように、それが内部結束力の弱い、便宜的な範疇であることを示す。ほんとは何も資格を書かなくてもよいのであり、要するに外部に向かって露出している最高位の指定辞SPEC5 が文主語、そしてそれに対応する【=相互c統御する】AGs'が述部、ということになるのである。「AGsP」という範疇資格は、たとえばこの構造の上に補文化子が掛かった場合に初めて顕在化する。それまでは文主語と述部との対にすぎない。

さて、主語というものを《最高位の指定辞で、外部に向かって露出しているもの》と考えると、節文構築の進行する過程・段階でそれぞれに対応するローカルな「主語」が形成されていたことになる。SPEC1 というべき最初の「主語」は、勿論V' と対を組む主語であり、このように早く出現することがS O O T h 2 の特徴なのであるが、SPEC2 として次に出現する「主語」に注目されたい。何と、それはV' と組む目的語\*である。皮肉な言いながら、V P レベルでの「主語」は目的語なのであり、それがS O O T h 1 (Specifier-Original-Object Theory) の時代から継承された田原流の思想なのである。

目的語の地位がV P レベルでの「主語」であるとすれば、それが対格に格選択されるような機構、すなわち上からのAGo の引率の効果で初めてその位置での安定性を獲得する。その機構が働かなかった場合、それは対応する述部V' との結束力がまだ弱いうちに摘出されて、文主語に進出するような機構が働く事例が当然想定される。その一つが受動構文の生成過程であって、図のAGo の認知的素性として[相対的受動性]が焦点化された場合、そこに他動詞Vが編入されて過去分詞が合成され、Vからの配率の力を失った目的語\*(SPEC2)はSPEC3→SPEC4の地位を経て文主語SPEC5 に昇進する。

しかし英語では、受動構文以外にも、目的語\*がAGo によって対格を認可されたSPEC<sub>VP</sub>として生起現場に固定されないような構文が存在する。その一つの例が難易文 John is easy to deceive. のような文であり、別の例が This shirt washes easily. のような「中間構文」 'middle construction' である。難易文の分析はまたの機会に譲り、本稿では、なぜ目的語\*が対格を帯びた目的語として現場に固定されず、上位の指定辞として摘出・昇格されるのか、すなわち中間構文を成り立たせる条件は何か、考えてみたい。

ところで本節の趣旨は、認知意味論と和合する句構造はあるか、もしあるとすればそれはどんな形のものか、ということ进行を考察することにあつた。認知意味論というを広すぎて

手にあまるが、対象を絞って、少なくとも英語の中間構文に関する限り、SOOT<sub>h</sub>2が分析用具として立派に役立つようである。以上で縷々述べたように、VPがまだ結束性の弱いV'【そこには既に主語と他動詞Vとが含まれている。】と主語\*との併置にすぎない段階で、主語\*に対格を付与してVP内部に固定させてしまわないような機構を発見すれば、それが中間構文の発展の契機になるわけである。しかし、句構造文法の枠内での考察であるから、意味論を取り込みつつも、あえて機構論を次節で展開してみよう。

#### 4. 中間構文の乗り物たる句構造の機構

かつて田原(1998a)などの拙論で、主語\*すなわちSPEC<sub>v</sub>がVと受動者資格述語AGoとに挟み統率されていれば、主語\*は対格に格選択され、その場に固定される、という考えを述べた。しかし、より正確には、このことはAGoが[相対的受動性]という素性を取った場合に言えることであって、AGoが取る素性によっては必ずしもAGoが格選択機能子として働かないことがある。勿論、そういうAGoを、たとえばAGm【mは'middle'から採って】として別扱いにすることもできようが、ここでは一応AGoのままとしておく。そのようなAGoに乗り込む素性として[属性より断]と[動作主影響]とが考えられる。

実はこれらの素性は、ゼロ述語の素性が[属性断]に選択されて初めて登場するものであり、〇が[動作主影響]である場合は、AGoの素性としての[属性より断]と[動作主影響]は含意に留まり、決して意識の表面には出されない。たとえば中間構文(4)(5)と事件記述(6)(7)とで…

(4) This book sells well. 「この本はよく売れる」 …………… [属性より断]

(5) This car drives comfortably. 「この車は気持ち良く走れる」 …… [動作主影響]

(6) The clerk sold this book well. 「店員はこの本をよく売った」

(7) We drove this car with much effort. 「我々は大変苦勞してこの車を運転した」

(4)では《よく売れる》という事態が《この本》の属性の責任で進行しているのであり、(5)では動作主から受けた運転という作用の反作用として、動作主に難易感や快／不快感を車がフィードバックしているのであるから、それぞれAGoに乗り込んだ素性[属性より断]と[動作主影響]が顕在的に働いている。そして(6)(7)の場合でも、客観的事実関係としては恐らくそれらの素性は事態の実現に寄与している筈——本をよく売るためには本の内容がよくなければならず、車の属性は運転の困難感を運転者に与えた筈であるが、それらの素性は焦点化しては表現されない。(6)(7)を受動化しても同じことである。従って、中間構文が起動される最初のきっかけは、〇[属性断]が選択されることである、と言える。

さて、〇の素性として[属性断]が選択されると、次に、何についての属性記述かという対象を決めなければならない。中間構文はVPレベルの「主語」たる主語\*の属性を記述する文であるから、主語\*の性格を決定する資格述語AGoの素性を決めなければならない。それがれいの素性[属性より断]と[動作主影響]になるわけであるが、実はこれらは二者択一の選択肢ではなく、共起可能なものと考えられる。

以上のように、中間構文の成立の条件を究明するには、中間構文の精細な認知意味論が不可欠であるが、幸い、1997年11月8日、第22回関西言語学会で横山（現姓坂本）真樹が発表した際に配布した「中間構文の認知的意味のネットワーク」と題するハンドアウトが手許にあり、よくまとめられているので、それに沿って検討したい。

## 5. 中間構文の類型のネットワーク

ネットワークというのはラネカー流の思想であり、言語の有意単位の（多義的）意味に関して「プロトタイプ、（metaphorとmetonymyによる）プロトタイプからの拡張、それらから抽出された共通項としてのスキーマ」から成る体系とされる。中間構文も一つのカテゴリーであるから、やはりこのネットワークをもっている。これに関して横山(1997)は次のように主張している。《①中間構文は、本来能格構文【田原註：いわゆる非対格構文のこと。これを能格構文と呼ぶのは広く流布した誤用である】のカテゴリーが（芋づる式に）拡張して、新しいカテゴリーとして成立したものである。②中間構文のプロトタイプは、本来動詞で表わされる行為を対象に対して行なうと想定される人間の存在が読み込まれ、人間と中間構文の主語の属性との相互作用が慣習化されることによって成立したもので、人間の行為と（物の）属性の相互作用かつ状態変化がある。③上記のプロトタイプを源泉として、一方では状態変化が属性によって進行するという方向へ、また一方では行為を行なう人間の経験の質（難易、快／不快）を属性が決定するという（状態変化は関係ない）方向へと中間構文のカテゴリーは拡張している。》

私見によれば、この主張は全般的には良質の説得力をもっている。まず（不適切な名称ながら）「能格構文」というのは The window broke. The door opened. のような「なる」自動詞構文で、概して事件記述文であり、図1では主語を欠き・Vと目的語\*だけをもつ構造から出発する。その際、AGoの素性は受動的ではあるが、Vの項が一つしかないから、相対的には中立的であり、対格の格選択機能をもたないと考えられる。

次に、This window breaks easily. This door opens easily. のような文は「能格構文」と中間構文との移行的構文であって、窓を壊す動作主／扉を開ける動作主が想定されなければ「能格構文」、暗黙裡に想定されれば中間構文と解される。このように中間構文の性格は連続的に高まっていくものなのである。これらの例文が中間構文と解される場合、AGoは[属性より断]という素性を身に着けるので、変化の終点(→ゴール難)が通常予想される。

しかし結果動詞といえども、終点のある一回きりの変化でなく、結果事態が複数の細かなステップに分かれて進行するような意味をもつとき、そのような進行のしかたが焦点化されて、物の属性として描写されることがある。This book is selling quickly. These programs are enrolling fast. のような文がそれにあたる。

次に、AGoが[断より難]という認知的素性を取った場合、AGoは目的語\*の性格を決定する述語であるから、目的語\*は主語すなわち動作主に対して難易や快／不快の手応えをやり返す。



This book sells easily. This car drives comfortably. のような文がそれに該当するが、横山は状態変化にも注目してこれを「中間構文のプロトタイプ」だとしている。

ところで、SOOTH 2 の図式として掲げた図 1 が遠くなり、参照に不便となったので、改めて図 2 として掲げることにするが、その際必要な改善も加えておく。

図 2

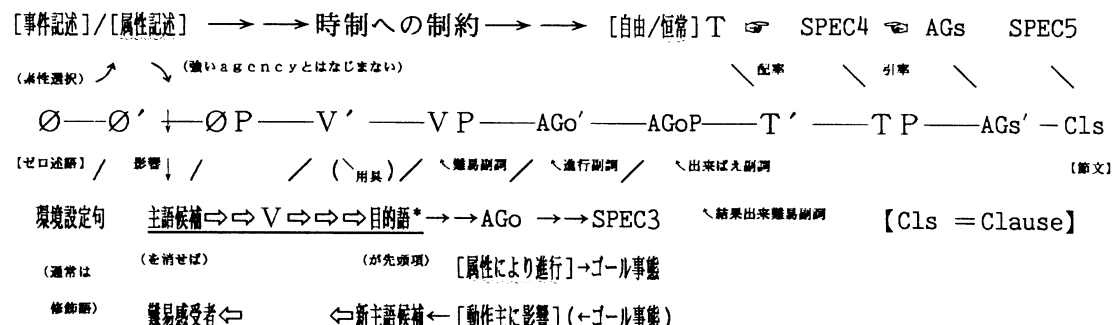



図 2 では[事件記述]の場合を省いたので、能動文と受動文が派生する過程は書かれていない。そして、選ばれた素性[属性記述]が時制への制約として T に影響し、その素性として[恒常]を選ばせ、現象面では殆ど常に現在時制として出現することも図で示唆している。また[属性記述]が強い動作主性とはなじまず、その結果主語候補が表現を抑圧され、V P レベルでは目的語\*が先頭項＝唯一のローカルな「主語」になることも、図に示されている。

さて、横山の主張に戻るが、manner verb が対象から動作主に影響をやり返すように働く場合、つまり動作主の行為がどのように遂行できるかを対象の属性がコントロールするような中間構文が、プロトタイプからの拡張として派生する。This book reads easily. This piano plays easily. のような文がそれで、変化後の事態は想定されない。

最後に、元来の環境設定句が主語に進出する非人称自動詞中間構文があり、This music dances well. This lake fishes well. などが属する。それは環境があたかもダンス／魚釣りをうまく進行させるためのコントロール力を行使しているかのように認知されることから来ているが、図 1 ではゼロ述語の補語として設定句を置いてあるから、そこからの主語進出として処理できよう。

以上のように考察すると、横山が「中間構文の意味のネットワーク」としてハンドアウトに添えたスキーマの図はすべて図 2 で処理することができることになる。しかし実は、横山の中間構文のレパートリーには一つ不十分な点がある。谷口一美(1996)が指摘しているように、たとえば hammer という manner verb が flat というゴール事態述語を伴えば、 This metal hammers easily. / ◎ This metal hammers flat easily. のように容認性に差が生じるが、それは、結果述語によって AGoP が result verb 化されたことを意味する。別の例だが This shirt washes easily. と This shirt washes white easily. とでは副詞 easily の叙述スコープが異なる。後者では(un)washed shirt が white-washed shirt とい

うゴール事態になる過程の難易を問題にしているのであり、洗うこと自体は必ずしも容易でないが、一旦洗われればシャツは容易に白くなるというケースも想定される。従って、それらの同形の副詞が修飾する階層成分を考察することも必要になろう。

ただ、This metal hammers flat easily. This shirt washes white easily. のような結果補語構文から来る中間構文の句構造は、あまりに複雑になるので本稿では省略したが、田原(1998a)などに挙げた間接受動構文の、情報分割を利用した分析を参照できるお方にとっては理解は容易であろう。要するに[<sub>NP</sub>shirt-prd.] で・SPEC3 が[e-white]なのである。そしてこの場合、AGo には[<sub>NP</sub>より断]と[断に<sub>NP</sub>]の両素性が共起すると考える。シャツは属性で白くなりやすくても、その際動作主にも難易感を与えるからである。

図2こそ中間構文の意味論を乗せて扱うことができる句構造であり、authorshipは田原に帰属するとはいえ、内容は坂本真樹に依拠したものである。ここに記して彼女の栄誉を讃えたい。また、[<sub>NP</sub>]が文主語(SPEC5)に進出する過程や、Vが最終的にTと連れ立ってAGs の位置に編入されることについては、改めて述べない。現在、句構造に無関心な認知文法家がいつの日か句構造にも目を向けたとき、このモデルは力を発揮するであろう。

#### 参考文献

- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. The MIT Press
- Langacker, Ronald (1995) 'Raising and Transparency' *Language* Vol. 71 No. 1, pp. 1~62
- 田原 薫(1997a) 「ゼロ述語から出発する句構造文法」『ニダバ』第26号 西日本言語学会
- 田原 薫(1997b) 「新句構造文法S00Th2の基本理念」『言語文化学会論集』No. 8、言語文化学会
- 田原 薫(1997c) 「新句構造文法S00Th2の基本理念(続篇)」『言語文化学会論集』No. 9
- 田原 薫(1998a) 「主語初頭生起説から見た英語の完了構文」『ニダバ』第27号
- 田原 薫(1998b) 「新句構造文法S00Th2の基本理念(完結篇)」『言語文化学会論集』No. 10
- 田原 薫(1998c) 「Langacker(1995) 繰り上げ説の虚妄」『言語文化学会論集』No. 11
- 谷口一美(1996) 「中間構文：他動性と事態解釈からみた成立条件」 *Kansai Linguistic society* 16, p. 206
- 辻 幸夫(1998) 「認知言語学の見取り図」『言語』11月号、pp. 30~37 大修館書店
- 横山真樹(1997) 「中間構文の認知的意味のネットワーク」(ハンドアウト：第22回関西言語学会の研究発表で提出)